

令和八年度 入学試験問題(推薦C)

小論文(その一)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

最近の人工知能(AI)ブームは、人間のロボット化を加速しているような気がする。人工知能は膨大なデータを瞬時に分析することができ、深層学習によって必要なソフトを自動的に探しあて、適切な分析方法を考案することができる。今、さまざまな場所で利用されつつあり、生活は効率的に便利になってきている。それは喜ばしいことだが、同時に人間がAI的になってきていることが危惧されているのだ。

AIを東大に入学させようとする「東ロボくんプロジェクト」を実施してきた新井紀子さんは、AIは文章の意味を理解することが苦手だという。ある言葉にまつわるこれまでのデータを検索し、それが使われてきた文脈に沿って解答するので、その言葉が使われているその文章の意味を読んでいるわけではないからだ。たとえば、おいしいイタリアンレストランを教えると質問し、その後ですまいイタリアンレストランはと問うと、同じ場所を答えるという。レストランを探すとき、「すまい」という言葉がほとんど使われないので、「うまい」場所に収斂(ようれん)してしまうのである。

驚いたことに、日本の中高生にAIの苦手な質問をしてみると、かなりの割合で誤って答えてしまうという。これは、子どもたちの頭脳がAI的になっているせいだと言っている。文章の意味を考えずに、言葉を検索して頭のなかで個々の属性だけをつなぎ合わせているのである。これでは、せっかく「思考力・表現力・判断力」を向上させようとして記述式の試験を導入しても、成績は上がらない。読解力が低いままに大学で高等教育を受けても、知識も技術も身につけることはできないと新井さんは嘆く。

これは、人間が言語を手にして以来、脳の中身を外部化してきた当然の、しかし大いに危惧すべき結果なのではないかと私は思う。

言語は、環境を名づけ、それをもち運びせずに他者に伝える効率的なコミュニケーションである。見えないものを見せ、現実にはないものを想像させて、人間に因果的な思考や抽象的な概念をもたらした。文字は言葉を化石化させて時間や空間を超えて伝達できる道を開き、電子メディアの登場は画像や映像の技術を革新して、人間の視覚と聴覚の世界を急速に拡大した。これらの過程を通じて、人間はそれまで脳にとどめておいた記憶や知識を外部のデータベースに収納し、そこにアクセスさえすればいつでも利用できるシステムを構築したのである。

少し前まで頭で覚えていたことが、今ではスマホのなかに納まっている。友人の電話番号も、地理情報もこういったデータベースに頼らざるを得なくなっている。生まれたときからスマホを手に入れている子どもた

令和八年度 入学試験問題(推薦C)

小論文(その二)

ちは、こういったICT社会に慣れてしまっている。そのうち、データを利用して考えることさえも、AIに任せてしまうようになりはしないだろうか。文章を読解する能力をもたなくても、AIさえあれば生きていける。でもそうなったとき、人間は動物ではなくロボットに近い存在になっているのではないだろうか。私には思えるのである。

(山極寿一『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』毎日新聞出版より、一部改)

問一 文中の傍線部分「人間がAI的になってきている」とはどういうことなのかを、二〇〇字以上二四〇字以内で説明しなさい。

問二 私たちの生活においてAIの利用がますます進んでいく時代に、どのようにAIと共存していくかと考えていますか。あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。